

21 初期の九大皮膚科と旭憲吉教授

○長門谷洋治・坂上 俊之¹⁾

九大皮膚科、旭憲吉（一八七四〜一九三〇、以下旭）に無縁の演者らがこれに言及するのは僭越であるが、第九八回日本医史学会が福岡市で開催されるのを機に、旭正一教授（産業医科大学皮膚科）らのご教示を得て、いささか述べることをお許しいただきたい。

京都帝国大学福岡医科大学が、わが国三番目の国立大学として創立されたのは明治三六年で、京大の名を冠したのは当時単科独立の大学は認められなかったからという。同四四年に九州帝国医科大学、大正八年九州帝国大学医学部となる。

旭は明治三二年東大卒、同三六年文部省から皮膚病学微生物研究のためドイツ留学中に、京都帝国大学福岡医科大学助教授に任じられ、同三九（一九〇六）年帰朝、同年

一〇月一八日同大学教授となり、初代の皮膚病学及微生物学講座を担任。大正八年より同一〇年まで附属医院長。彼は京都市上京区に生まれ、一高を経て東大に。卒後、土肥慶蔵教授の皮膚病微生物学教室に入り助手となる。明治三一年教授についた土肥にとって、彼は初期の自学出身者であり期待するところ大であった。しかし弟子に厳しい土肥は彼に対しても容赦するところはなかった。東大に次ぐ京大の皮膚病微生物学講座は同三五年に開講し、松浦有志太郎が教授に就た。彼も東大卒であるが土肥門ではない。また京大より僅か遅れて発足した九大に京大から教授などの人材を送るのとは不可能である。九大初代の教授が東大出身者を主に構成されたのは当然であろう。旭が土肥の元にいたのは約三年、教授に就たのは三二歳であった。彼と東大同年卒の稲田龍吉も九大の教授（内科）となった。

旭は着任一ヵ月後の明治四〇（一九〇七）年に日本皮膚科学会九州支会を発足せしめた。皮膚科の地方会の発足について『日皮会誌』などを探索した桜根太郎氏は、九州のそれは東京地方会（明治三四年二月二日創始）に次

ぐものだが、その開催の日にちが不明だとした。九大皮膚科では大正三年に『我教室ノ新築ト七年』なる冊子を刊行し、そこに「日本皮膚科学会九州支会記事」（井尻辰之助執筆）が登載され、第一回につき詳しく報告しているが九月とあるのみで日についての記載を欠いている。今回演者らは『東京医事新誌』（同四〇年九月二八日発行、一五三一号三九頁）などにあたり、それが九月二二日（土）午後一時より内科大講堂で行われたことが判明した。本会はその後、日本皮膚科学会福岡地方会と名を改め、本平成九年三月で第三〇〇回を迎えた。福岡については大阪（明治四二年五月七日）で発会をみている。

旭の著述（共著）のうち、演者らの手元にあるものをあげれば以下である。

①ムラツエック著、山田弘倫（以下山田）、旭共訳『黴毒図譜』二二二頁、南江堂書店、明治三四年（彩色図譜入り。本書はムラツエック著、筒井八百珠訳『皮膚病図譜』明治三三年と対である）

②山田・旭共著『皮膚病診断及治療法』三二二頁、朝陽堂書店、明治三四年

③右に同じ。第四版、五一七頁、朝陽堂書店・南山堂書店、明治四〇年

④山田・旭共著『花柳病診断及治療法』二四八頁、朝陽堂書店、明治三五年

⑤右に同じ。ただし旭・山田の順、第一〇版、六三〇頁、南山堂書店、大正九年

旭の創製したものに円形脱毛症の内服薬「玄華」がある。旭は昭和四年、土肥に代って日本皮膚科学会会頭となり、岡山市での第二九回日皮総会を仕切った。そのときの岡大皮膚科教授 皆見省吾が彼のあとを継いだ。岡山総会の後間もなくの昭和五年一月、旭は師の土肥より先に死亡した。五五歳であった。

本稿を記すにさいし旭正一・北村公一・本房昭三・寺畑喜朔の各先生にご教示を得た。謝意を表す次第である。

(1) 大阪府豊中市
(2) 京都府城陽市